第30回記念交歓会開催にあたり

横浜善光寺留学僧育英会理事長　黒田博志

本年、横浜善光寺留学僧育英会は留学僧派遣後第三十回を迎えることが出来ました。まさに関係皆さまの篤いご支援のもとに寺檀一体となり今日に至りました事、心より感謝申し上げます。当育英会発願者、初代理事長である師父は、新寺建立、横浜の地に善光寺を開創し十五年。自らの信念に基づき一大発願し、留学僧育英会を提唱し実現に至りました。

「若い僧侶を見るとき、どうしてもあのころの自分と照らし合わせてしまいます。どんなにつらい体験も、みじめな体験も、すべて修行となり、肥やしとなる。あのときの感動を多くの人々と共に味わいたい。そんな気持ちが、わたしに育英会をつくらせたのです。」と師父は語ります。後に「ゼロからの出発」と題し小冊に残されている話には小さき寺ながらも寺の護持に加え、育英資金を捻り出すことの至難さも窺い知らされます。そのような中でも師父は将来を見据え、今なにが出来るか。何をすべきかを常に考え、人とのご縁を大切にし、相手の心に深い印象を与え続けてきました。

一年先を見る者は花を育てる
十年先を見る者は樹を育てる
百年先を見る者は人を育てる

仏法に基づく人材育成。その信念をあのほとばしる情熱を以って貫き通した師父はこの育英会を二十一年間の継続の中、突然遷化致しました。

「宗祖を通して釈尊に還る」を理念とし「生かされている命を、一滴残らず仏法のため、人のために、使い切ってから一生を閉じる」と誓願し歩まれた師父。

病床の師父は私に「博志、後は頼むぞ。檀信徒を大事にして善光寺護持に身命を尽せ。」そして、「育英会は、善光寺の使命、お前は出来るだけでいいから続けてくれ」と言われました。が、師父と私では、全てにおいて天と地程の違いがあり、住職となるも寺を護持することで精一杯の日々。止む無く三年間の休会となりましたが、師父の残してくれたご縁の方々の篤い思いが、ひと筋の光となり育英会を再開する事が出来ました。

「法の華は人によりて開く」と、師父は遺されております。

「仏道も企業もまた然り、人によって繁栄し衰退する。人あれば栄え、人によって滅ぶ。人材は集めるものではなく育てるものと私は心得る。私の計は百年単位。百年に一人の聖が留学僧の中から生じてくれればそれでいい、それでいいのです。」と。

第三十回生を含め留学僧育英生は一三〇名となります。皆さま各界でご活躍しておられます。本年三十回を迎えるにあたり当会理事で第六回育英生でもある駒沢女子大学安藤嘉則教授より「育英生各々が留学先で得た経験を初代理事長に改めて報告し感謝報恩の誠を捧げる場が持てないか。きっと他の育英生もその機会を待っていると思うよ」との有難いお話を頂き、師父に対しての篤い思いに感激し、また理事の皆様方にもご賛同いただき、この交歓会開催の運びとなりました。育英会のこれまでの歩みや果たしてきた役割を振り返り、更に現在の世界状況や、インターネットなどの文明が進化した中で、仏法に基づく人材の育成の意義を再認識し、菩薩行の尊さを共に分かちあい、更にこの育英会を次代へ続けていくために何をなすべきかを語りあう場となれば幸甚に存じます。

「三十にして立つ」。区切りとなる今年、交歓会に先立ち育英生の皆様には異国の地での修行や体験談などをお送り頂き、このように記念誌にする事が出来ましたこと、心より感謝申し上げます。また、当会の名誉顧問であられる大乗寺山主東隆眞老師、理事であられる西有寺専門

僧堂堂長山口晴通老師にお祝いのお言葉を賜り厚く御礼を申し上げます。

本日、ご参集頂きました皆様方におかれましては、設立者初代理事長の真前にて育英生としての経験やその想いを忌憚なくご披露いただきますよう、また今後、育英生同士の交流も更に盛んならんことを念じております。

不肖ながらも師父の理念を承継し、百年の計を目指し精進して参る所存です。そのためには皆様方のお力が不可欠です。

今後ともご指導ご鞭撻ご支援を賜りますよう何卒よろしくお願い申し上げます。